



ドス・パソス

北緯四十二度線

スタインベック

おけら部落 二十日鼠
と人間 贈り物

尾上政次 瀬沼茂樹
杉木喬 西川正身訳

世界文學大系



圖書課備付



世界文学大系 87

ドス = パソス・スタインベック

昭和38年 2月28日発行

訳者代表	尾上政次
発行者	古田晁
印刷者	山元正宜
発行所	株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話 (291)局 7651

目次

ドス・パソス

北緯四十二度線(U・S・A 第一部) 尾上政次訳 5

スタインベック

おけら部落

瀬沼茂樹訳 217

二十日鼠と人間

杉木喬訳 308

贈り物(『赤い小馬』より)

西川正身訳 361

ジョン・ドス・パソス論

サトル耕作訳 381

スタインベックもしくは

C・E・マニイ

非人称小説の限界

中村真一郎訳 387

解説

大橋健三郎

年譜

396 404

裝
幀
庫
田
發

ド
ス・
パ
ソ
ス

北緯四十二度線

(U・S・A 第一部)

若者は夜の街路にまばらになってゆく人むれの中をドンドン一人で急いでゆく。両足は何時間もの歩行に疲れ、目は人々の顔の暖かな丸みを、相応じてくれる目のきらめきを、頭のすわり具合を、肩のあがり方を、手の開き閉じる模様を、一心に求めている。血は渴望にたぎり、心は唸り刺す希望の蜂の巣である。筋肉は痛いほど、職業の知識を、道路工夫の鶴嘴とシャベルの仕事、漁夫が横揺れするトロール船の手すりからぬるぬるした網を引き上げるときの鈎使いのコツを、白熱したリヴェットを投げおろす橋工夫の腕の振り方を、節氣柄を慎重ににぎっている機関手の熟練を、農夫が驟馬に声をかけながら、畦から鋤を引き上げる際の全身の使い方、を、あこがれている。若者はただ一人で群集の中を探し求めつつ、目を見はり、耳をそば立て、自分だけ、ただ一人で、歩いてゆく。

通りには人気がない。人々は地下鉄にすし詰めになり、市電やバスに乗り込んでしまった。駅では近郊列車に遅れまいと駆けつけ、ゾロゾロ下宿や借家に帰り、エレヴェーターでアパートの部屋に上って行った。一軒の店のショー・

ウィンドーでは、シャツだけになった顔色の悪い飾付け屋が二人、まっ赤なイーブニング・ドレスを着せた飾り人形を持ち出していて、町角にはマスクを着けた溶接工たちが、燃え立つ青い焰の中に身を乗り入れながら電車線路の修繕をし、酔っぱらった浮浪者が数人ふらふら歩きまわり、悲しげな顔の売笑婦が街灯の下で所在なげである。河からは、波止場を離れる蒸気船の地をゆるがすような深い汽笛が聞こえてくる。曳船がはるか遠くで盛んに警笛を鳴らしている。

若者はただ一人、ドンドンと、しかし満足するほど速くはなく、遠くまで、しかし十分遠くにはなく、歩いてゆく(人々の顔が彼の前から音もなく消え去り、話し声は切れ切れのざわめきにうすれ、足音が横町をますます遠ざかつてゆく)。彼は終発の地下鉄、市電、バスに駆け乗らねばならない。あらゆる蒸気船のタラップを走り上り、あらゆるホテルに宿泊し、あらゆる都会で働き、求人広告に答え、あらゆる下宿屋に泊まり、寢床という寢床に眠らなければならぬ。寢床一つ、仕事一つ、生命一つでは、足りないのだ。夜になると、渴望に頭をたぎらせながら、彼はただ一人、ひとりぼっちで歩いてゆく。

仕事もなく、女もなく、家もなく、町もない。

ただ、言葉をとらえようと一心になっている耳だけは、ひとりぼっちではない。耳はしっかりととらえられている。さまざまな言いまわ

しの憂が、冗談口のきき癖が、抑揚のない物語の終りが、乱暴なセンチメンスのたち切り方が、それにしっかりと結びついている。からまり合う言葉の巻きひげが、都会の町々を這いめぐり、舗道一面に拡大し、小公園式の幅広い通りに沿って伸びてゆき、ざわめき唸る公道を長い夜の行程に出発するトラックの群れとともに疾走し、砂地の田舎道のくずれかかった農家の側を嘯き通り、いくつもの都市、給油所、機関庫、蒸気船、空路を手探りして飛ぶ飛行機を連結する。人語が山の牧場に呼びかわされ、末は海と静まりかえった波打ちぎわへと広がる河伝いに、ゆっくりと漂いくだる。

夜押し合う人混みの中を長い間歩いたときも、彼はやはり孤独であった。またアレインタウソンの訓練所でも、シャトルの埠頭で暮らした日にも、少年時代の暑い夏の夜ごとにワシントン市にたちこめた空虚な悪臭の中にも、マーマー街での食事の際にも、サン・ディエゴの赤茶けた岩から飛び込んで泳いだときも、ニュー・オーリーズズの蚤だらけのベッドの中でも、湖の沖合いから吹いてくる剃刀のような冷たい風にさらされているときにも、ミシガン大通りの下の通りで、ギヤの軋る中で震えている灰色の顔の群れにまじっていたときにも、特別急行列車の喫煙室の中においても、全国中を歩きまわり、峨々たる水のかれ果てた大溪谷を車で上ってゆくときも、イエローストーン国立公園の凍りついた熊の通り小道で睡眠袋なしに寝た夜にも、クイニピアック河でカメラをかけた日曜日

ごとにも——孤独であることにはかわりがなかった。

しかし、昔ずっと昔のことと話す母の言葉に、ぼくが子供だった頃という父の語に、叔父たちの冗談めかした雑談のうちに、学校で子供たちのする嘘つばちや、傭人の手柄話、さては兵隊たちが消灯ラッパのあとで飛ばす与太のうちに、彼はそれほどのさびしさを感ぜなかった。

それは耳にからまって離れぬ言葉、血の中にわき立つ血縁——U・S・Aであった。

U・S・Aは大陸の一片である。U・S・Aは親会社の集団であり、労働組合の総和であり、犢皮装の法律全集であり、ラジオ網であり、映画館の連鎖であり、ウェスタン・ユニオンの局員が、黒板に消しては書き込む相場表であり、古い新聞と、余白に鉛筆で異議をなぐり書きしたはし折れの歴史書で充満した公立図書館である。U・S・Aは山と丘に縁だられた世界最大の谷間、U・S・Aはあまりにも多くの銀行預金を持ちすぎるおしゃべりの官吏たちの集りである。U・S・Aはアーリントン墓地に軍服のまま葬られた数多くの人々である。U・S・Aはきみが家から離れたとき、宛名の最後に書く文字である。しかしながら多くの場合は、U・S・Aは人民の言葉なのだ。

(以上は『U・S・A』全編の総序である——訳者注)

ニュース映画一

丘を攻め登りゆくは
かの自由の民
死物狂いの叛乱軍
抵抗する地めがけて

首都の世紀終了す

きらびやかな軍服姿で精悍な軍馬にまたがったマイルズ將軍は衆目のまどであった。特に彼の乗馬が極度に落着きを欠いていたがゆえにであった。軍楽隊が総指揮官の前にさしかかるや、馬は後脚ではとんど棒立ちとなった。マイルズ將軍は間髪を入れず手綱を引きしめ拍車を蹴込んで制禦しようとしたが、馬は観衆のあれよあれよという間に後ろにドウとたおれ、総指揮官の真上に落下した。將軍に怪我はなく一同大いにホツとしたが、乗馬の横腹の皮が相当の範囲にわたってすりむかれた。外套は一面に街路のはこりにまみれ、両肩の間に約一インチの穴があいていた。ほこりを払う人の手も待たず將軍はふたたび馬上にまたがり、何事もなかったかのように閱兵をつづけた。

この事件は当然群衆の注意をひきつけたが、その結果として、將軍が軍旗の通過する際にはかならず脱帽し、通過し終わるまで着帽しないという事実もまた注意にのぼった。

また豪勇無双のB中隊長
まっ先立っての奮戦ぶり
真の軍人の名にそむかず
鉄砲だまもなんのその

官憲悪習に無知

衛生委員会シカゴ河を下水路とす ミシガン湖百川の父と握手 ドイツ小鳥組合カナリヤ競鳴会開始 十六対一比例の複本位制運動は失敗せずとブライアン氏言明

英軍マフエキングで敗る

ルソンで多くの人が殺されたからは

諸島の永久領有を主張す

ハミルトン・クラブ、インディアナ州選出前下院議員ボーシ氏の演説に傾聴

密業者新世紀を歓迎す
労働者新世紀を歓迎す
教会新世紀を歓迎す

マッキンレイ氏新年早々官邸で熱心に執務

国民新世紀の黎明を歓迎す

インディアナ州インディアナポリス市にお

けるコロンビア・クラブ招宴の席で、「コロンビア万歳！」の乾杯に答えて、前大統領ベンジヤミン・ハリソン氏の言葉はだいたい次のとおりであった。「わたしはこの席でもまたどこにおいても、領土拡張について非難するつもりはもっていないが、ある人たちのように、領土拡張を国民的発展のもっとも安全にして魅力的な進路であるとは考えていない。豊富にして低廉な石炭と鉄、食糧品の莫大な生産過剰と生産における発明と合理化のおかげで、我々は今や、殖民国家のうちの本家本元にしてもっとも偉大な国を、ひき離しているのである」

社交界の令嬢ら震えあがる、刑事と踊って

ルソンと

ミンダナオで多くの人が殺されたからは

踊り子たちニュー・ジャージーで襲わる

スター女優の石版画の一つは、アトランティック・シティ¹⁸海水着顔負けの丸出し姿でまっ赤に焼けたストリーブに腰かけているものであった。片手になみなみとつがれたぶどう酒のグラスを持ち、他の手には跳ねまわる二匹の蝦^{あひだ}の上に張りめぐらしたリボンをつまんでいた。

ルソンと

ミンダナオと

サマールで多くの人が殺されたからは

「二十世紀」への乾杯に答えて、上院議員アルバート・J・ベヴァリッジ氏の言葉はだいたい次のとおりであった。二十世紀はアメリカの世紀となるであろう。アメリカの思想がそれを支配するであろう。アメリカ式進歩がそれに色彩と方向を与えるであろう。アメリカ的行為がそれを輝けるものとするであろう。

文明はけっして上海を手放しはしないだろう。文明はけっして香港より去りはしないだろう。北京の門がふたたび現代人の手段に対して閉ざされることは断じてないであろう。世界の更生は、物質的にも精神的にも、すでに始まっている、革命はけっして後退はしないのである。

りっぱな人がいっぱいフィリピンで殺されて

どこかさびしい墓場で眠っている

- (1) フィリピンは米西戦争（一八九八）の結果米國領土となったが、土民のゲリラ隊の掃蕩戦はつづいた。
- (2) 米西戦争のときの米國總指揮官。
- (3) ミシシッピ河。
- (4) ウィリアム・ジェニングズ・ブライアン（一八六一—一九二五）。北西部の農民、商工業者を代表して、銀本位制度を熱心に主張した。
- (5) 南ア連邦の町。
- (6) フィリピン。
- (7) （一八九七—一九〇二）。米國第二十五代の大統領。
- (8) ニュー・ジャージー州の町。有名な海水浴場。

カメラの目（一）

通りを歩くときはいつでも気をつけて敷石を踏むようにしないとキラキラした心配げな草の葉を踏みつけてしまうお母さんの手を持ってそれにすがっておれる時はずっと気が楽だそうすれば思いきり足を蹴上げて歩くことができるのだがとどきどき歩いてはならないかわいそうな傷ついていた緑の舌が足の下でちんちんでゆくもしかするとこの人たちがあんなに腹を立てて拳を振り立てながらぼくたちを追っかけてくるのはこのせいかもしれない皆で石をぶつつけているのだ大人が石をぶつつけているお母さんは大またに歩きぼくらは走ってゆくお母さんの尖った靴先がかわいそうな踏みこじられた草の葉の間で黒色のドレスのゆれる襷の下にはつきりと浮かんでいるイングリズ人のやつ 小石が一つ敷石の上を音をたててころがってゆく

早く坊や早くこの絵葉書屋の店にここなら静かだお腹を立てている人たちは外にいるのここにはいつてはこれないのよ non nein nicht englander amerikanisch american Hoch Amerika Vive l'amerique（人だアメリカ人じゃないアメリカ人）お母さんはニコリするねえ坊やわたしあの人たちがほんとにこわかったわ

草原^{ワザ}での戦争クルーゲル將軍³ブルーム
フォンテイン、レディスマスそれから先の
尖ったレースの帽子をかぶったお婆さんの
ヴィクトリア女王はクリスマスに兵隊さん
たちにチョコレートをプレゼントした

勘定台の下は暗いそしてその女主人、
アメリカびいきでトレントン市に親戚のあ
る親切なオランダ人の女主人は暗闇にも光
る絵葉書を見せてくれるきれいなホテルや
宮殿 O que c'est beau schon pittee

britie (まあほんとに)そして月光橋の下にく
だけのさざ波に小さな街灯は勘定台の下
の暗闇の中に輝き港をとりまくホテルの小さ
な窓々 O que c'est beau la lune (まあお
ほんにこと)
そして大きな大きな月

(1) オランダ。当時ボリア戦争(一八九九—一九〇二)
ため、オランダとイギリスとの間には険悪な空気がたど
っていた。

(2) ボリア人政治家、トランスヴァール共和国大統領。

(3) いずれも南ア戦争の戦場。

(4) アメリカのニュー・ジャージー州の首都。

マック

河向こうの銀細工工場からの風がやむと、フ
エイニイ・マックリリーの生まれた灰色の四世
帯木造長屋は鯨油石鹸のにおいで一日じゅう息
がつまりそうだった。ほかの日にはキャベツと

赤ん坊とマックリリーの細君の洗濯釜^{せんたくかま}のにおい
でムツとしていた。フエイニイは、びっこでシ
ョボショボした薄鳶色の口髭をはやした胸のペ
チャンコのおやじが、チャドウィック工場の夜
警番で昼間ずっと寝ていたので、家では遊べな
かった。五時頃になるとやっと、渦巻く煙草の
煙りが居間から台所に洩れてくるのだった。そ
れは、おやじが目をさまし、上機嫌で、間もな
く夕めしを食べたいと言いだすしるしであった。
フエイニイは、自分たちの家とそっくり同じ
木造家屋の列にはさまれた短いドロコ道^{ドロコミチ}の二
つのかどのどちらかまで、使いに走らされるの
だった。

右のほうへはフィンリの店まで半町で、そこ
で彼は泥のはねかかったズボンの林の中で、大
人たちのどなり立てるくさい口がビールとウイ
スキーですっかり栓をされるまで、スタンドの
ところで待ってなければならなかった。それ
から一歩一歩ひどく慎重に踏みしめながら、ビ
ールの手桶の柄が手に食い入るのを、家まで歩
いて帰るのだった。

左のほうへは「マジニス高級食料品店。内外
食料品販売」まで半町であった。フエイニイは、
ショウ・ウィンドーの「小麦の女王」の厚紙製
の黒ん坊、ガラスのケースの中のいろんなイタ
リア式腸詰、じゃが芋とキャベツの櫛^{くし}、砂糖の
茶色いにおい、おがくず、しょうが、燻製にし
ん、ハム、パン、胡椒、ラード、が好きだった。
「おじさん、パン一斤おくれ。それからバター
半ポンドとしょうが菓子を一箱と」

おふくろのかげんが悪い夕方なんかは、フエ
イニイはもつと遠くまでゆかねばならなかった。
——街角をまがりマジニスの店を過ぎ、市電の
通っているリヴァーサイド大通りを下り、赤い
橋を横切つて、冬には氷で下をえぐられた雪の
堤の間を黒々と流れ、春の雪どけには黄色く泡
立ち、夏には褐色にドンヨリとむ小さな河を
渡つてゆく。河の向こうからリヴァーサイド大
通りと本町の角——そこに薬屋^{ヤクヤ}があった——
まで途中ずつとチェッコ人とポーランド人が住
んでいた。その子供たちはオーチャード通り
に住んでいるマフィーとかオーハラとかオフラ
ナガンの姓を名乗る家の子供たちと絶えず喧嘩
をしていた。

フエイニイは、白い紙にくるんだ薬瓶を二股
手袋をはめた片方の手にかたくにぎつて、膝を
ガクガクさせながら歩いてゆく。クインス通り
の角に一群の少年がいて、そのそばを彼は通ら
ねばならなかった。通り過ぎるのは何でもなか
ったが、二十ヤードばかり行き過ぎると、最初
の雪つぶてが耳をヒューンとかさめるのだ。仕
返しはできない。もし駆けだせば、やつは追っ
かけてくるだろう。もし薬瓶を落としてもすれ
ば、家に帰ったときならぬことだろう。や
わらかいやつが頭の後ろにポスンと当たって、
雪が首から下にしたたり落ちるのだった。橋へ
半町のところまでくると、一か八かで一目散に
逃げだす。

「卑怯者……ボロ家のアイランド野郎……ガ

ニ股のジャガイモ小僧……お巡りに言いに帰っていらあ」……とポーランドとチェツコの子供たちは雪つぶての合間にわめくのだった。彼らは雪つぶてに水をかけ、夜の間に凍らして、カチカチにした。もしそれが一つでも当たれば、血がにじみ出た。

遊ぶのに心から安全だと思えた所は裏庭しかなかった。そこには破れた垣根、へこんだゴミ箱、修繕するには穴のあきすぎた古い鍋類、鶏の羽根や糞の落ちてゐるからつぼの鶏小屋、夏には豚草、冬にはぬかるみがあつた。しかしマツクリー家の裏庭の偉観ともいふべきはトニ・ハリマンの兎小屋で、そこにはベルギー種の兎を飼つていた。トニ・ハリマンは肺病やみで左手の一階に母親と暮らしていた。またあらゆる種類のほかの小動物、あらゐ熊、かわうそ、それに銀狐までも飼うつもりで、そうして金持になる算段だった。彼が死んだ日、兎小屋の戸についた大きな南京錠の鍵が誰にも見つからなかった。フェイニイは兎を数日間、キャベツやちぎの葉を二重に張つた金網越しに押し込んで養つた。そのうちに、庭に出られないみぞれと雨の一週間がきた。晴れ上がった最初の日に見に出てみると、兎の一匹は死んでいた。フェイニイはまっさおになつた——あれは眠っているんだと自分に言いかけようとしたが、兎はぶざまにコチンと横になつていて、眠っているのではなかつた。ほかの兎たちは片隅に寄りそつて、大きな耳を背中にダラリと垂らせながら、鼻をピクピクさせてあたりを見まわしていた。かわ

いそうな兎たち！ フェイニイは泣きそうになつた。二階のお母さんの台所にかけ上がり、火のし板の下に頭をつっこみながら調理台のひき出しからハンマーを取り出した。最初やつたときは指をいやというほど叩きつけたが、二度目によりやく錠をこわすことができた。小屋の中は、変にすっぱい臭いがした。フェイニイは耳をつかんで死んだ兎をつまみ上げた。やわらかいまつ白な腹はふくらみ始めていて、ドロんとした片目が開いてゾツとするようだった。突然フェイニイは何かに襲われて、兎を手近のゴミ箱に投げ込み二階に駆け上がった。まだ悪感がついてブルブルふるえながら、忍び足で後ろのヴェランダに出、下を見おろした。それからいきをこらしてほかの兎たちを見つめていた。彼らは用心ぶかくピョイピョイとびながら、小屋の入口のそばまで来て、庭に出かかつていた。そのうちの一匹は外に出ていた。そいつは、ダラんと垂れた耳を急に立てて、後足で立つた。おふくろがこのときアイロンをストーブのところから持つておいでと言つた。ヴェランダにもどつてきたときには兎は全部いなくなつていた。その冬チャドウィック工場にストがあつて、おやじは失職した。おやじは一日じゅう居間について、煙草をふかしたり悪態をついたりした。「ふんとおれあれつきとした一人前の男だぞ。おれの松葉杖が背中にくくりつけてあつたつておれがあいのめいめいしいポーランド野郎のどいつでもぶんなぐれなかつたら、首でもあげますあ……バリの旦那にそう言ってやるんだよ。わ

しはストなんかには加わらねえ。なあバリの旦那、わしは物のわかつたおとなしい男でがす。ちよつとは病人だが、それに女房や餓鬼のことも考えてやらにやならねえ。八年間もわしは夜警をやつてきたというに、今となつてあんたはわしを首にして探偵社から暴力団のやつらをかかえこもうとなさる。このきたならしい、ししつ鼻の馬鹿野郎め！」

「あの薄ぎたねえ外国者がストなんどやりさえしなけりやなあ」と、誰かが慰め顔に答えるのだった。

ストライキはオーチャード街では人氣が悪かつた。つまり、おふくろはいっそうせい出して働き、ますます大きな釜いっすいの洗濯をしなければならないし、フェイニイと妹のミリは学校から家に帰ると手伝わねばならなかつたのである。そのうちにある日、おふくろが病氣になつて、アイロンの仕事を始めるのをやめて、寝床にもどらねばならなくなり、丸いしわの寄つた顔を枕よりもまっ蒼にさせ、水仕事でふやけた両手を顎の下ににぎり合せて、横になつた。医者が来、次いで地区の看護婦が来た、そしてこの長屋の三つの部屋全体が医者と看護婦と薬の臭いがして、フェイニイとミリが腰をおろせるところは階段しかなかった。そこに彼らは二人で坐つて声を立てずに泣いた。やがて枕にのつかつたおふくろの顔は、クシャクシャにまるめたハンカチみたいな皺のよつた小さな白いかたまりにかわつてしまい、皆は、死んだと言つて、彼女を外に運び出した。

葬式は隣のブロックのリヴァーサイド大通りの葬儀屋から出た。フェイニイは、誰も彼も接吻して頭をなでてくれ、まるで大人みたいに行儀がよいと言ってくれたので、大自慢で偉くなったように思った。そのうえに彼は、新しい黒い服を着せられていた。大人の服のようにポケットから何までついていたが、ただズボンが短かった。葬儀屋には彼がそれまで近寄ったおぼえがないいんな人たちがいた——肉屋のラッセルさんにオードンネル神父、それからシカゴから駆けつけた叔父さんのティム・オーハラ——、そしてあたりはフィンリの店みたいにウイスキーとビールのおいがプンプンしていた。ティム叔父さんはでこぼこの赤ら顔とどんよりした青い目をもった瘦せ男だったが、何となくフェイニイの氣に入らぬゆるい絹の黒ネクタイをしていて、まるでジャック・ナイフ式にからだのスッポリ畳みこまれるみたいに、腰から下に突然かがみこんでは、だみ声でフェイニイの耳にささやき続けるのだった。

「あいつらのことは氣にするなよ、なあきみ、あいつらはどういともやくざで偽善者ばかりなんだ、大方はもうすっかりへべれけになってござる。まあ見てごらん、太っちゃのオードンネル坊主ときたらはやお布施の勘定をしているんだから。だがきみはやつらのことを氣にしちゃいけない。きみはお母さんのほうからオーハラ家の血を引いているんだ。それを忘れないでおいで。わしはあいつらのことは氣にせぬ、なあきみ、それにおまえのお母さんとはに血

筋を分け合ったわしの正真正銘の妹だから」家に皆が帰ってくると、フェイニイはおそろしく眠く、足は冷たくぬれていた。誰も注意を払ってくれる者はいなかった。彼は暗闇でベッドのはしに腰をおろしてすすり泣いていた。居間では人々の声とナイフやフォークの音がしたが、そこにはいつてゆく勇氣はなかった。彼は壁のほうに向かって丸くなり寝入ってしまった。明りがまぶしくさして、目がさめた。ティム叔父さんとおやじが大声でしゃべりながら枕もとに立っていた。二人とも何だか様子が変で、すっかり立っておれないようだった。ティム叔父さんがランプを持っていた。

「どうだ、フェイニイ君」とティム叔父さんはランプをフェイニイの頭の上で危っかしく振りまわしながら言った。「フィーニヤン・オーハラ・マックリリー、ちゃんと目をあけてきみの意見を聞かせてくれ、我々は躍進途上にある大シカゴ市に引越そうというのじゃが。有体に申すならばじゃ、このミドルタウンなんて犬も喰わぬ町じゃて……なあ、悪く思うなよ、ジョーン……が、シカゴとくりや……ほんまにおまえあそこに行ってみりや、今まで死んで棺桶の中に釘づけだったことがわかるうてもんよ」フェイニイはこわかった。両膝を顎のところまで引き上げ、震えながらゆらゆらするランプに照らされた二人の大人のふらつく姿を見ていた。物を言おうと思ったが、言葉が唇でひからびてしまった。

「小僧はねとるんじや、ティム、おまえさんが

そんなに演説をやったって……フェイニイ、着物をぬぎなよ、それからベッドに入ってゆっくりねるんだな。みんなあすの朝たつんだから」そして雨の降る翌朝おそく、朝食もせず、フェイニイがホジソン貸馬車屋に呼びにやられた貸馬車の屋根の上で、縄でしばった大きな古い頭でっかちのトランクを危っかしく踊らせながら、彼らは出発した。ミリは泣いていた。おやじは黙りこくって火のつかぬパイプを無性にすすった。ティム叔父さんが万事の世話を引き受け、しよっちゅう誰も笑わない冗談を言いつづけ、折があるたびにポケットから札たばを引っぱり出したり、ポケットに用意しておいた瓶からゴクゴク音をたてて飲んだりした。ミリは泣きに泣き続けた。フェイニイは貸馬車のそばを過ぎてゆく見なれた街々が突然妙な具合に傾いて見えるのを、かわいた大きな目で見ていた——赤い橋、ポーランド移民の粗末な屋根板の家、スミス商店とその街角の薬屋……ビリー・ホーガンがチューイン・ガムの包み片手に今出てくるところだ。また学校をさぼったな。フェイニイは彼を大声で呼びとめたい衝動を感じたが、何かがそれを凍りつかせた。……櫛の並木と市電の走っている本町、教会の角をまがったところの商店街、それから消防署。フェイニイは最後の見おさめとその暗い入口をのぞくと、消防自動車の実銃と銅の曲線がうっとりするような美しさで光っていた。次に第一組合教会のボール紙でつくったような正面、カームル・バプティスト教会、ほかの教会のように道にいか

めしい正面を向けてまっすぐに立っているのちが、敷地に斜めに建てられた煉瓦造りのセント・アンドルーズ長老教会、次に商工会議所の芝生に立っている三頭の鹿の銅像、そしていくつもの住宅、そのどれもに芝生があり、雲形のヴェランダがあり、あじさいのしげみがあった。その次には家は前より小型になってゆき、芝生は姿を消した。貸馬車はシンブスン穀物飼料倉庫のかどをまがり、床屋、酒場、簡易食堂の並ぶ中をガタガタ過ぎたと思っているうちに駅前でみんなが降りるところであった。

駅の屋台食堂でタイム叔父さんはみんなに朝飯をご馳走した。彼はまだ隅に正札のついたままの新しい大きなハンカチで、ミリの涙をふき、フェイニイの鼻をかんでやって、ペイコン・アソド・エグズとコーヒの食事にかからせた。フェイニイはまだコーヒを飲んだことがなかったので、大人のようにちゃんとした恰好でそれを飲むんだと思うとひどくうれしかった。ミリは、コーヒはおいしくない、にがい、と言った。彼らはカラの皿とカラのコーヒ茶碗を前にしてうさんくさそうな目でカウンターの後ろから見て、鋭い目を受けながら、しばらくの間食堂で顧客もなしに残っていた。そのうちに、巨大な、あらゆるものを粉砕するような震動とともに、シュポッ、シュポッ……ポッ、と汽車が駅にはいつてきた。彼らは大あわてにとび立ち、プラットフォームをころげるように走って、煙草の煙りのたちこめた客車に入ってゆき、ふと気が

つくと汽車は走っていて、コネティカット州の朽葉色の冬景色が窓外にカタカタと過ぎていた。

(1) アイルランド出身の人たち。

(2) コネティカット州中部の町。

カメラの目 (二)

ぼくたちはかび臭い厩のようなにおいのする馬車で船に乗ったように揺られながら急いでゆく、彼は、ねえルーシあの連中の一人をうちの食事に招いたとすればきみはどうするかね、と言いつづけた、あの連中は実際い人間なんだ黒人はねルーシ、そして彼は丁香を入れた銀の小箱を持ちライ麦ウィスキーのにおいを口にさせながらニュー・ヨーク行きの汽車に遅れまいと急いでゆく

そして彼女は、ああこまったわわたし遅れなければいいけど、と言いつづけスコットが切符を持って待っていてぼくたちは七番街駅のプラットフォームを走って上らねばならなかったそして戦艦オリンピア号の小さな大砲がポロポロ落ちてばかりいるので皆してしゃがんで拾い集め車掌が、皆さん乗車ください奥さん早く奥さん

それは小さな真鍮製の砲で七番街駅のプラットフォームの上で日を受けてキラめいていたスコットがぼくたちをみんな押

し上げて汽車が動き出し機関車のベルが鳴っていてスコットはマニラ湾海戦記念日の極小型の爆竹をやっとおさめる小さな真鍮の大砲を一つかみこちらの手の中に入れながら、ジャック君さあ大砲だよ、と言った

そして彼は特等車の中で弁じ立てていた、だってルーシそりや人類のため是非必要とあればぼくだっていつでも出征して弾に当たるぐらいのことはするよなあジャックおまえだってするだろう？ ポーイ君きみだってするだろう？ ポーイはアポリナリス・ウィスキーを持ってきたのだったそして彼は頭文字の入った絹ハンカチがいつでもベールラムのにおいのする茶色の旅行カバンの中に酒ビンを入れていた

それから汽車がアーヴル・ド・グラースにとまったとき彼は言った、ねえルーシ覚えておきなさい橋ができるまではサスケハナ河を渡船で背わたったものだよ

それからガンパウダ川も同じだったね

(1) 彼は作者の父、彼女は母のこと。

(2) メアリランド州の町、サスケハナ河にのぞむ。

(3) サスケハナ河の南に並行し、チェサピーク湾にそそぐ。

マック

朽葉色の丘、点在する森、農家、牡牛、牧場でふざけまわっている一匹の赤い子馬、柵、幾

糸もの沼地。

「なあ、ティム、おれは鞭でひっぱたかれたやぐざ犬の気がするよ……ティム、おれあ、ずっときょうまで正しいことをしようとおとめてきたんだ」とおやじは早口でくり返しつつけた。「ところが今じゃ世間でおれのことをいったい何て言ってることだろう？」

「ほんまにおまえ、ああするよりおまえに何もしようがなかったんじゃないか？ 全体どうしたらいいっていうんだい？ 金もない、仕事もない上に、医者だの葬儀屋だの家主だのは勘定書をつきつけるし、二人の子供は食わさなきゃならないし……」

「いやおれはおとなしいちゃんとした男だった、結婚して落ち着いてからずっと手堅く地味に暮らしてきた。それなのに、このおれが鞭でひっぱたかれたやぐざ犬みたいにこそそそ逃げ出すなんて、今世間ではどう思ってるだろう？」

「まあジョンよ、血筋を分けたわしの本当の妹の亡くなったあれのことを悪く言う気はわたしには毛頭ない……が、おまえさんの罪でもわしの罪でもないんだ……みんな貧乏の罪なんだし、貧乏というやつは階級制度の罪だ……フィーニヤン、ちよっとおまえはこのティム・オーハラ言うことを聞きな、それからミリもな、こういうことは女の子だって男と同じに知ってないくちやいけないんだから、それにこのティム・オーハラは今一生に一度の本音をはいってるんだ……人間にその労働の実を与えない階級制度の罪なんだ……資本主義制度から何か得をするや

つというのはイカサマ師ばかりだ。そういうやつはちよいとの間に百万長者に成りおおせる……ところがジョンとかわしのようなまじめに働く人間は、百年働いたって一人前の葬式を出してももらえるほど金が残せないというわけだ」
煙りが窓の外に白く巻き流れ、その驥の中から、木、電信柱、四角い板葺きの小さな家、町、電車、そして湯氣を立てている馬が整然と並んでいる四輪馬車の長い列、がふるい出されてゆく。

「それに誰が我々の労働の実を手に入れるかといえは、一生の間生産的な仕事ひとかけらしたことのないいまましい商人、周旋屋、ブローカーの連中なんだ」
フェイニイの目は低く落ちては舞い上がる電線を追っている。

「ところで、なあジョン、シカゴは楽なところじゃけつてない、それは請け合ってもいい、が今じゃ勤労者の腕と頭にとっては東部よりいい捌け場だ……なぜかというに、なあきみはなぜかと聞いたんだらう……？ 需要と供給さ、シカゴでは労働者がいるんだ」

「ティム、おれはひっぱたかれたやぐざ犬だと言っているじゃないか」

「階級制度なんだよ、ジョン、そりやくそいまいましい階級制度なんだ」

車室の騒々しさでフェイニイの目がさめた。暗くなっていた。ミリがまた泣いていた。どこなかわからなかった。
「さあ、皆さんがた」とティム叔父が言ってい

た。「我々はなつかしのニュー・ヨークにこれから着くところだすぜ」

駅では明るかった。フェイニイはもう夜だと思っていたのでそれは意外であった。彼とミリは待合室でスーツケースに腰をおろして、長い間待たされた。待合室は、見たこともないような、絵本に出てくるようなかわそうな人たちでいっぱい、途方もなく大きかった。ミリは泣き続けた。

「こら、ミリ、泣きやまいと一発やるぞ」
「どうして？」とミリは、鼻声で言って、ますます泣きじゃくった。

フェイニイは、ほかの人が二人がいっしょだと思わないように、彼女からできるだけ離れたところにいた。彼自身泣きだしそうになった頃になって、おやじとティム叔父が帰ってきて、彼らとスーツケースをレストランに運んでいった。飲んだばかりのウイスキーの強烈なおいが彼らの息から漂い、二人とも目のまわりがひどく赤いようだった。みんなでまっ白なテーブル・クロスを敷いたテーブルに坐ると、白い上衣を着た愛嬌のある黒人が、いっぱい字が印刷してある大きな紙を皆に手渡した。

「ご馳走を食うことにしようや」とティム叔父が言った。

「これがこの世の食いおさめというわけかもしれないがね」

「いくらかかろうと知ったことかい」とおやじが言った。
「罪は階級制度にありだ」

「ローマ法王なんてくそくらえ！」とティム叔父が言った。「そのうちにおまえさんを社会民主主義者に宗旨変えさせるよ」

フェイニイはかきフライにチキン料理にアイヌ・クリームにケーキを食べさせられたので、皆が汽車に乗るのに駆けたとき、横腹がおそろしく痛かった。みんなは石炭ガスとわきがのにおいのむつとたちこめた三等車にはいった。

「いつわたしたち寝にゆく？」とミリが鼻声を出し始めた。「寝にはゆかないのさ」とティム叔父が陽気に言った。「ここで寝るんだよ、かわいい鼠みたいに……チーズの中のかわいい鼠みたいにな」「鼠なんかわたし大きらい」と、ミリはまた大粒の涙をこぼしながら金切り声で言ったが、この時汽車が動きだした。

フェイニイの目は痛んだ——耳には絶え間のないとどろき、踏切を通過する時のガッタン、ガッタンという騒音、ブリッジをくぐるときの突然のうなり声、があった。これはトンネルなんだ、シカゴまでずっとつづいているひとつのトンネルなんだ。向い側にはおやじとティム叔父の顔が真っ赤になって、今にもはえつきそうにみえた。おやじたちの顔つきは嫌だったし、車内の明りは煙りで暗くチラチラ動かし、外はずっとトンネルだし、目は痛み、車輪とレールが耳にワーンと鳴り、彼は眠りに落ちた。

目がさめると町で、汽車は本通りのまん中をつつ走っていた。晴れた朝だった。仕事に出かける人々、商店、歩道のそばに並んだ四輪馬車やパネつき荷車、新聞の売り、煙草店の表に立

っているインディアンの木彫人形、が目にはいった。初めは夢を見ているのかと思っていたが、そのうちに思い出して、ここはシカゴにちがいないときめた。おやじとティム叔父は向いの席で眠っていた。口がポカンと開き、顔はまんただで、顔つきが変に嫌だった。ミリは毛糸のショールをからだ一面にかけたまま、まるくなっていた。汽車は速力をおとしはじめた。駆だ。もしここがシカゴならおりなくちゃ。そのとき車掌が通りすぎた。オードネル神父にちよつと似た老人だった。

「あの、おじさん、ここはシカゴ？」「シカゴはまだずつと先だよ、坊や」と車掌はニコリともしないで言った。「ここはシラキューズだよ」それから皆が目をさまし、何時間も何時間も電信柱が後ろに走り、町、木造の家、キラキラ光る窓の幾列も並んだ煉瓦造りの工場、ゴミ捨場、操車場、耕地、牝牛……ミリは汽車に酔い、フェイニイの足は、座席にあまり長くすわっていたので、今にも抜け落ちそうになった——雪の降っていたところもあったし、日の照っていたところもあった、そしてミリの酔いは果てしなく続き、はじめなくらい嘔吐物の臭いがして、そのうちに暗くなり、みんな眠った——そしてふたたび明るくなったと思っているうちに、町や木造の家や工場がズンズン集結しはじめ、倉庫や穀物置場に拡大し、操車場が見わたす限り一面にひろがると、それがシカゴだった。

しかしひどい寒さだったし、風がほこりをまっこうから吹きつけ、目はほこりと疲労で全然ふさがってしまったので、何も見えなかった。ミリとフェイニイが寒風の中でからだを寄せ合って、みんな長い間待ちあぐんだ後、市電にのって果てしもなく行きつづけた。ひどく眠かったのか、全然はつきりしなかった。ティム叔父の声が誇らしげに、興奮して、シカゴ、シカゴ、シカゴ、と言いつづけていた。おやじは顎を松葉杖にのせかけたまま坐っていた。「ティム、おれあひつぱたかれたやくざ犬みたいな気がする」

フェイニイはシカゴに十年間住んだ。はじめ彼は学校に通い、土曜日の午後は裏の空地で野球をやったが、そのうちに最後の卒業式がきて、子供たちは「わが国よなんじこそ」を歌い、学校は全部おしまいで、彼は仕事につかねばならなくなった。ティム叔父は当時、ノース・クラーク街のごみごみした横町にある危うい煉瓦建築の一階に、自前の端物印刷所を持っていた。印刷所はその建物のほんの一部分だけで、残りの大部分は倉庫に使われ、風で有名を馳せていた。店には一枚の幅の広い板ガラスの窓があって、「端物印刷業ティモシ・オーハラ」という金色の古風な英語の字体が燦然と光っていた。

「ところで、フェイニイや」とティム叔父が言った。「今がおまえがこの商売を第一歩から習ういい機会なんだよ」そして彼は使い走りをし、回状やビラやポスターの包みをとどけにまわり、市電を危く避けたり、大きな荷馬車馬の泡を吹